

なんぶちょう

南部町 (青森県)

地元交流資源を活用した 「達者村」づくり活動

住民と来訪者の交流による「達者の循環」でめざす
“究極のグリーン・ツーリズム”

【取組の概要】「観光農園」「産地直売所」「ホームステイ」の3つの事業を ベースに、“達者”で活力ある田舎づくり

南部町は青森県南東に位置する豊かな農作地帯で、八戸市から車で15分程と都市部に近接している。町内の観光農園や直売所には、果物狩りをはじめとする農業体験希望者や新鮮な果実・野菜などを求める観光客が訪れ、賑わっている。

南部町は、2006年1月1日に、旧名川町ながわちょうと旧南部町なんぶまち、旧福地村ふくちむらの2町1村の合併によって誕生した。南部町の代名詞となっている「達者村」プロジェクトは2004年10月9日、旧名川町で始まり、合併後に南部町全域で推進されるようになった。「達者村」とは、特色ある地域資源を生かし、来訪者と住民との交流を深めることを目的とした取組〔バーチャルビレッジ（擬似農村）〕である。「達者」とは、健康で長生きし物事に熟達することを意味し、来訪者も町民も交流することにより共に達者になることを目指す。

「達者村」が開村する前、旧名川町では、各農園で行われていた「さくらんぼ狩り」をきっかけとして、町民と行政が一緒になって様々な取組を展開してきた。例えば、「さくらんぼ狩り」にやってくる観光客にお土産を買ってもらおうと、農家の女性による農産品の産地直売所や運営団体が誕生し、また、都市農村交流を進めようと農業体験をする修学旅行生のホームステイ受入事業が始まった。これらの旧名川町の取組が、現在の「達者村」プロジェクトのベースとなった。

2006年、合併に伴い「達者村」プロジェクトは新たなスタートを切り、住民35名、町職員12名からなる「達者村づくり委員会」が立ち上がった。住民からは、直売所、商工会、ホームステイ連絡協議会、観光ガイドクラブ、食生活改善推進委員会など関係団体の様々な役職・立場の人が参加し、合併で1つになった町村の事業も含めて、“達者”で活力ある田



南部町の農園に立つ指導者付き
共同管理農場の看板



農家女性たちで運営する農産物産地
直売施設「名川チェリーセンター」

舎づくりが始まった。

そしてまた、「達者村」プロジェクトを成り立たせているという意味で注目される側面がもう一つある。それは、それぞれの実践の現場では、常に女性が前面に出て活躍してきたということである。町の担当者は言う、「直売所の主人公も女性、ホームステイの主人公も女性ですよ。農業観光では、(農産物を)作る方は圧倒的に男性の方が高い技術を持っているけど、売ることに関してはやはり女性ですよ。南部町が多少グリーン・ツーリズムで知られているとすれば、元気な女性が多いからですよ。」

1. 「達者村」プロジェクトのベースとなった

「観光農園」・「産地直売所」・「ホームステイ」

(1) 「観光農園」の誕生から現在まで

さくらんぼ農園の誕生と「さくらんぼ祭り」の開催

南部町の馬淵川^{まぶちがわ}流域は稲作、町南部の台地一帯は果樹栽培が行われている。青森県南東部のこの一帯は、夏季に「やませ」という冷たい風が吹き込んでくることがあり、昔は稲の生育に与える影響が大きかったため、地勢的にも果樹栽培、特にりんごの栽培を推進してきた歴史がある。合併前の旧名川町では早くからりんごの栽培が盛んに行われ、隣接する八戸に出荷してきた。1970年代にはさくらんぼが高値で取引されるようになり、りんごの樹に病気が流行したこともあって、りんごからさくらんぼへ植えかえられ、このときに旧名川町のさくらんぼの栽培面積が大きく広がっていった。

一部農家が先駆的にさくらんぼ祭りを始めてみると、他の果物より人気が高く、収益面でも上々の成果を収めたことから、さくらんぼの栽培面積はより広がっていった。1986年には、受入農家の組織化と合わせ、さくらんぼ祭りの期間中を「名川さくらんぼまつり(現・さくらんぼ祭り)」としてPR。その後、「さくらんぼ祭り」は毎年行われ、現在も6月中旬から7月中旬までの間には、セレモニーやさくらんぼの種飛ばし大会など、多彩なイベントが開催され、大勢の観光客で賑わっている。

「さくらんぼ祭り」から始まった様々な地域の取組

86年に始まった「さくらんぼ祭り」は、その後、農業や農業観光の振興にとどまらず、「農産物直売所」や「ホームステイ」など様々な地域づくり活動を生み育てる“苗床”の役割を果たすようになっていった。さらに、2004年度からは「達者村」プロジェクトを担う重要な柱の事業となっていった。

「さくらんぼ祭り」のイベントに来た観光客は、さくらんぼ祭りだけではなく、さくらんぼを始めとする様々な農産物や加工品などを買って帰る。イベントには、農家の主婦に

よる農産物加工グループも出店しており、後にこのグループが、年間3億円を売り上げる農産物産地直売施設「名川チェリーセンター」を運営する「名川チェリーセンター101人会」（後述）に成長していった。

また、「さくらんぼ狩り」のイベントでは、関連企画の一つとして、さくらんぼ農家に民泊してさくらんぼの収穫を体験するという事業「さくらんぼ狩り&ホームステイ」が登場し、これが、後の農業体験修学旅行生の受入（後述）へと発展していった。

「さくらんぼ狩り」から「農業観光」へ推進組織が進化

さくらんぼ狩りの組織も、時代とともに“農業観光”を推進する組織へと進化していった。「さくらんぼまつり」が始まった1986年に、さくらんぼ狩りをする農家による連絡協議会が立ち上がり、参加する農家が増加、協議会は行政との連携のもと、毎年さくらんぼ狩りを地域の農業観光事業として定着させていった。

2002年には、東北新幹線八戸駅開業を契機に、通年で農作業体験ができる体制を整備し、通年型の農業観光を進めていこうという「四季のまつり」も始まった。さくらんぼの収穫期間は6月～7月の約1か月と短いため、他の果物狩りも農業観光のプログラムに加えることにしたほか、2003年度には、ハウス栽培による「いちご狩り」を冬のプログラムに加えた。さらに、メニューには稲刈りや枝切り（剪定）、花の見学などのほか、摘果や選定などの管理作業も加わり、修学旅行や遠足など四季折々の来訪者に、年中対応できるようにもなり、通年観光を行うようになると、さくらんぼ農家の連絡協議会は「名川町農業観光振興会」へと発展した。

さらに、「名川町農業観光振興会」の取組は、2004年の「達者村」プロジェクト（後述）の開始と、その後の3町村合併を経て、2006年には「達者村農業観光振興会」として再スタートした。「達者村農業観光振興会」の会員は約80名（2008年9月現在）。振興会の活動は、「さくらんぼ部会」、「果樹部会」、「花卉・野菜部会」からなる部会活動が中心となっている。入会する農家は、各部会費10,000円と保険料6,000円を支払い、希望に応じて1つから複数の部会に所属できる。3つの部会のうち、さくらんぼ狩りが期間的には一番短いにも関わらず、その収益性の高さなどから、「さくらんぼ部会」が振興会の活動の8割以上を占めている。

さくらんぼ狩りを始めた当初は、農園までの道路が悪く、観光客が道に迷うこともあったが、徐々に道路整備が進んでいった。観光農業を振興するにあたっては、達者村農業観光振興会（農家）と行政との連携で進めてきており、「黙って待っていて、お客が来る時代ではないから」と、旅行代理店への営業などにも積極的に取り組んでいる。

(2)「産地直売所」の誕生から現在まで

「さくらんぼ狩り」の観光客に地元の特産品を提供したい

前述のとおり、1986年、旧名川町（現南部町）では「さくらんぼまつり（現：さくらんぼ狩り）」が始まり、多くの観光客が訪れるようになった。しかし、せっかく来た観光客に手土産として購入してもらえるような手頃な地元産品が町にはなかった。そこで、農家の女性たちの間で、土産物になるような地元特産品を使った加工品を開発して販売しよう、という声が高まり、同年、農家女性36名（当初）からなる加工グループが立ち上がった。そして、グループによる梅の加工品販売が順調に売上を伸ばしていったことから、それに追随して特産品を研究開発しようという加工グループが次々と誕生していった。

農家女性たちのチャレンジ精神が実を結んだ「名川チェリーセンター」

グループが増えて加工品は充実してきたが、イベント等で販売するだけであったため、売上を増やそうと、店舗を求める声が上がった。より大きな売上へと結びつけたかった加工グループが町に常設の農産物直売所の整備を要望すると、グループによる自主的な運営を条件に、町による施設整備が実現することになった。そして、1991年12月、町内幹線道路の国道4号線沿いに農産物産地直売施設「名川チェリーセンター」がオープンし、加工グループの農家女性たちを中心に新たに結成された「名川チェリーセンター101人会」が、その運営を行うことになった。

チェリーセンターを共同で管理運営するとともに、自ら生産した品物を施設に並べて販売する101人会の女性会員は、当初86名だった。最初、本当は100人の女性会員でスタートしたかったが、前例のないことを農家女性たちだけで始めようとしたことや、入会するには入会金（3万円）が必要なこともあり、なかなかメンバーが集まらなかった。周囲からは「どうせ始めたところで3年持てばいいほう」、「入会金の3万円を捨てるようなもんだ」などと言われた。また、「農家の嫁に小遣いは無いというのが当たり前」という家も多く、運営に興味があっても、「農家の主婦には3万円もの大金は自由にならない」というケースもあった。

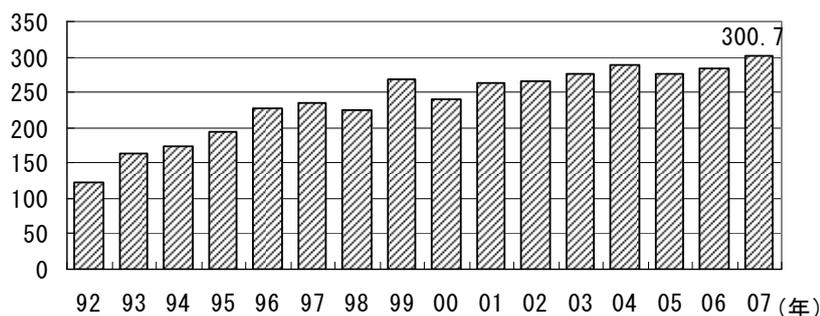
だが、名川チェリーセンターでの売れ行きは、多くの人の予想に反して順調だった。当初は、自宅で生産している農産物（各種果樹、野菜）のすそもの（規格外品）や農家女性たちが作った加工品（梅ジュース、漬物、ジャム等）などの売上で、年間2,000万円ほどあればいい、と関係者は考えていた。ところが、実際にオープンしてみると、予想を大幅に上回り多くの商品が売れ、初年度、1億2,000万円を売り上げることとなった。

高い売上が刺激となり産直の担い手希望者が急増

名川チェリーセンターの年間の売上は、オープン以降、右肩上がり順調に伸び続け、2007年度にはついに3億円を突破。101人会には入会希望者が殺到するようになったが、会員数は最大100人であるため、退会者がいない限り新たに入会できない状況になっている。101人会の「101」は、「常に100人という始まりの目標会員数に、新たな飛躍を続けるとの意味を込めて1を足して命名した」という。

当初、農家女性たちの小遣いになればという考えから、農産物のすそものや自ら作った加工品を販売していたが、今では顧客のニーズに合わせて、贈答用、規格品といった商品が200点以上店先に並ぶようになった。1996年からは町へ施設使用料として、売上の中から0.6%を納付できるまでになった。各会員は売上の10%（1998年から9%）を手数料として101人会に納めており、これがセンターを支える運営資金となっている。

(百万円) 「名川チェリーセンター」売上高の推移



皆で決めた厳しい会則で顧客の信頼を得る

チェリーセンターでは、商品を持ち込んだ会員自身が値段を決めて販売するフリーマーケット方式を採っており、全ての商品に生産者の住所や名前等が明記してある。

長年の組織運営の中で、101人会には、厳しい罰則を含めていろいろな会則が設けられた。「会員自らが作ったもの以外を売ってはならない、一度でもこの会則を破ったものは強制的に脱会」となっている。また、新鮮な獲れたてのものを販売するというので、「朝の5時よりも前に商品を陳列してはいけない、破った人は3か月間の出荷停止」という罰則もある。旬の新鮮な農産物を届け、売上を伸ばしているのは、こうした会則を設けて、自らを厳しく律してきた農家女性たちの努力の成果と言える。

家族が変わった！

チェリーセンターの開設当初、お母さんたちはお父さんたちから農産物のすそものを分けてもらって、自分達が加工した加工品と一緒に店頭で並べていた。最初の想定では、販売で得た利益がお母さんの通帳に少しだけ入るはずだった。ところが、活動を続けるうちに、お母さんの通帳に入るお金がどんどん増え、お父さんの収入よりも多くなって、なかには、1,000万円以上を売り上げるお母さんたちも出てきた。

すると、チェリーセンター向けの出荷を農業経営の柱とする農家が増えてきた。そうすると家族の様子も変わってきた。以前は、お母さんたちはお父さんの通帳管理のもとで黙々と働いてきたが、今は違う。チェリーセンターに来た人に喜んでもらえるような農産品を家族で考える。お父さんが、「これから、どのようなものを作付けしたらチェリーセンターで売れるのかなあ」と、お母さんに相談をもちかけるようになった。「今はお母さんたちが生き生きとしている」と会長は話す。それに、値段付けとか袋詰めなんかは小さな孫達でもできるため、家族全員で「いくら売れるかなあ」と話しながら作業をする農家もある。夕方7時になれば、今日の売上が幾らだったか分かる。

「お母さんに倒れられたら困る」ということで、お父さんたちが「母ちゃん支援の会」を作った。お父さんたちは自発的に、国道4号線沿いの草刈や、イベントの時はテント張りなど、お客を呼び込むための環境づくりを担ってくれる。会長は言う「ほんとにみんなに助けられながらやっています」。

波及的に増えていった産地直売所

こうした農産物産地直売施設「名川チェリーセンター」の成功は、地域の人々に大きな刺激を与えることとなり、類似の取組が次々と生まれるようになっていった。

2002年4月に、旧名川町（上名久井地区）にオープンした「そばのりけやぐ」もその一つで、産地直売施設とそば打ち施設と食堂が併設されている。「りけやぐ」は、この地域で「親しい仲間、仲のよい友だち」という意味で、農家の“お父さんたち”で組織するそばの生産者組合が100%名川産のそば粉を提供し、農家の“お母さんたち”で組織する「ながわ百笑^{ひやくしょう}苦^く楽^{らく}部」がそのそば粉を使って店舗を運営する形で立ち上がった。「百笑苦楽部」という名称は、「苦しいことはみんなで乗り越え、楽しいことはみんなで分け合い、みんなで朗らかに笑っていただけるような会」という願いから名付けられた。百笑苦楽部への入会金は10万円（出資金2万円、運営資金8万円）で、会員が経営から日々の調理、接客までを担う。「一人一人が経営者であり、労働者でもあって、自分達が頑張らないとお金にならない」と頑張っている。4～10月には、平日50人、土日100人以上が訪れ、特に桜のシーズンや、新そばが出たときは200食以上の注文がある。年間を通した売上は3,100～3,600万円と比較的安定している。

しかし、これまで簡単にやって来られた訳ではない。店舗を展開することになってからの準備期間には5年も要した。町のバックアップもあり、やっとオープンにこぎつけたが、オープンしてからも苦労は続いた。店舗が国道から離れているため、PRは大変で、特に、冬場は店舗が高台にあることなどから、ほとんど客が上がってこない。だが、次第に味が

いいという評判は広がり、新しい客も増え、新そばの時期にはわざわざ遠くから来る人も出てきた。また、これまでに「どんな大雪でも（お客が）ゼロという日はなかった」ということが会員の自信につながっている。

このほか、類似の取組では、旧福地村に「ふくちフレッシュ会」が運営する農産物等直売所「ふくちジャックドセンター」、旧南部町に「南部七草会」が運営する「なんぶふるさと物産館」が次々と誕生し、こうした産地直売所は、現在の「達者村」プロジェクトの大きな柱の一つとなっている。



そばの里けやぐ



ふくちジャックドセンター

(3)「ホームステイ」の誕生から現在まで

やってみれば楽しかったホームステイ

1993年、ある高校が旧名川町の農家にホームステイし、農業体験修学旅行を実施することになり、受け入れてくれる農家を探すことになった。

初めてのホームステイでは、まず生徒が来るまでが大変で、町の担当者は、泊めてくれる農家を探すため、新しい取組に興味を持ちそうな人に1軒ずつ電話してお願いした。「うちに泊めるのかよ?! ケガしたらどうすんだ? 病気になったらどうするんだ?」と言われながら、「農村の良さ、苦労したことを教えて欲しい、食糧生産の現場を見せて欲しい」と説得し、なんとかお願いした。受入に先立って、担当者らがホームステイを既に実施している秋田県田沢湖町に視察に行ったところ、「心配はいらない」、「生徒は意外と素直で楽しい」という話を聞いて安心した。

ホームステイに来る予定の生徒たちの写真が送られてきた。「うわっ、大丈夫かよ?!」都会の子どもらしく、写真には派手な髪型や化粧をした生徒の姿が写っていた。ところが、実際に受け入れたところ、田沢湖町で聞いたとおりだった。生徒達は素直で、まじめに農作業をし、気軽に話しかけ、しっかり働いて、農家の人に心を開いてくれた。それは、普段先生には見せない姿でもあった。帰り際に女子生徒が別れを惜しんで涙を流したり、「お母さんの



農家民泊の受入農家

作ってくれた料理、おいしかったよ」と言ってくれた。農家からは「思い切って受け入れて、本当に良かった」と言う声が返ってきた。

増加する修学旅行への対応

2年目の1994年からは、受入農家では「ながわホームステイ連絡協議会」を立ち上げて組織化し、会則を作って会費も徴収し運営にあたってきた。農業体験修学旅行へのニーズは年々高まってきたため、生徒の多い学校を受け入れできる体制を整え、生徒達と触れ合う喜びを共有しようと、他の地域との連携を進めることになった。1996年には、旧南部町にも受入の農家組織「なんぶホームステイ連絡協議会」が立ち上がった。

現在は、ながわ・なんぶの両協議会員に福地地区の新規農家を加えた「達者村ホームステイ連絡協議会（南部町）」の35軒をはじめ、^{さんのへまち}三戸町、^{はちのへしなんごうく}八戸市南郷区、^{たっこまち}田子町、^{はしかみちよう}階上町の各ホームステイ団体が加わり、^{さんばちほう}「三八地方農業観光振興協議会」を構成し、広域連携をすることで計80軒、300人までの受入が可能となった。

しかし、農家民泊の受入農家数が増えないなど課題も幾つかある。農家民泊をするには申請書類を作成しなければならないが、書類作成に慣れていない農家にとっては負担となっている。また、トイレの問題、お風呂の問題など、見せたくない部分があることから、「やってみたいけど、今の家じゃなあ。新しく建てたらやるよ」という人が多い。さらに、農作業が忙しい、都会の人達と接することが苦手、といった理由もあり増加していない。

レポート②

（「達者村ホームステイ連絡協議会」会長インタビュー）

思い出深い農家民泊

「（農家民泊に）来る前は生徒は嫌がるらしいです。知らない人の家に泊まらないといけない。言葉（方言）が分からない（笑）。修学旅行にやってくるのは、関東や関西の大都市圏からが多く、方言は生徒たちには分かりにくい。やったことがない農業体験を嫌がる生徒も多い。

ホームステイは2泊3日、農家1軒につき3～4名を受け入れる。生徒たちは、1泊目はまだ遠慮がちだが、2泊目になると家族と意志疎通ができるようになり、家の中を走り回る。滞在中、生徒達は農家の人と一緒に農作業をして、料理を作り食器を片付け、自分で蒲団を敷く。地元の言葉（方言）は半分くらいしか分からない。自宅で茶碗を洗ったことがないという生徒もいて、戸惑いもある。いろいろ体験をすることで、いつの間にか、生徒にとっては印象深い楽しかった修学旅行となるようだ。会長のご自宅には、たくさんのお礼状が届いているほか、大阪の高校の卒業式に招かれたこともあるそうだ。

中には、その後も農家と関係が続く

■農家民泊五つの心得

- 一、挨拶をきちんとしましょう。
- 二、ふとんの準備・片づけをしましょう。
- 三、お風呂ではタオルを浴槽に入れず、騒がず、静かに入りましょう。
- 四、家族と一緒に調理し、おいしく頂いた後は一緒に後片付けをしましょう。
- 五、お客様でなく家族の一員として、手伝い、語らい、そして心に残る思い出を作りましょう。

達者村ホームステイ連絡協議会

生徒もいる。京都の生徒が家出をし、修学旅行で泊まった会員宅に来たということもあった。収穫した農産物の注文を受けている農家もある。生徒達と農家との交流が、生徒を変え、農家の生きがいにつながっている。

「(この地域は) 黙っていても誰も来ないですよ。人を招くことから交流が生まれ、循環していれば、将来的には何かが変わってくる」、そう会長は話していた。

ホームステイを上手く進めるポイントは、やはり女性だという。まず、どこの家庭でも、女性が“うん”と言わなければ、ホームステイはできない。「名川地区では女の人を前面に出してきました。農業観光も産直もグリーン・ツーリズムも、うちは女の人です。女の人がメインでやってきて上手く回ってきた」、と会長は言う。

2. 「達者村」プロジェクトがつなぐ様々なグリーン・ツーリズムの活動

青森県が「あおもり「達者村」開村モデル事業」で旧名川町を選んだ

このように、南部町では「観光農園」、「産地直売所」、「ホームステイ」の3つの事業を農家と行政・関係団体が連携して行っている。

そうした中、青森県が「生活創造推進プラン」の一環として、2003年度に、旬の食材やゆったりと流れる豊かな時間をテーマにした観光を構築する「あおもりツーリズム創造プロジェクト」を提唱し、このプロジェクトのモデル事業として、『あおもり「達者村」開村モデル事業』を実施する事となった。

町では、これまでに「観光農園」、「産地直売所」、「ホームステイ」などのグリーン・ツーリズムを促進する施策を行ってきており、今後もその発展的展開を考えていたため、県と施策の方向性が一致した。そして、県と共に「達者村」プロジェクトに取り組むこととなった。

※青森県『あおもり「達者村」開村モデル事業』（県費単独・県直営）の事業費は、2004年度が934万円、05年度が904万円。05年度は旧名川町に一部を委託。

「究極のグリーン・ツーリズム」をめざす「達者村」プロジェクト

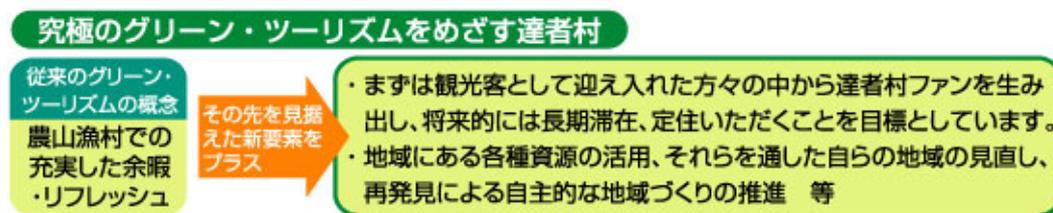
「達者村」プロジェクトでは、めざす地域の将来像を、「健康で長生きする」「物事に熟達し」みんなが達者になれる村とし、「友(ゆ)～ったり 遊(ゆ)～つくり 農(の)～んびり」をキャッチフレーズにしている。「達者村を訪れた方々に住民との交流を通して達者になっていただくとともに、地域住民(南部町民)みんなが来訪者との触れ合いにより達者になろう」、というように「達者の循環」への願いが込められている。そして、「達者村」プロジェクトがめざす“究極のグリーン・ツーリズム”実現への方策として、「農山漁村での充実した余暇・リフレッシュ」といった従来のグリーン・ツーリズムから、「観光客として訪れた方々の中からファンを生み出し、将来的な長期滞在・定住につなげること」や、「地域にある資源を活用することで、自らの地域の見直しや自主的な地域づくり推進につなげること」などを掲げている。

県による各種計画立案のもと、旧名川町では、2004年2月に役場関係各課職員や関係団体代表者からなる「達者村ワーキング・グループ」を結成、同年6月に町役場内に「達者村推進本部」を発足し、具体的な事業内容の検討や地元交流資源の洗い出しなどを行った。

「達者村」プロジェクトは、核となる施設を設けるのではなく、地域にある様々な文化や自然を見直す中から地域づくりを行おうというもので、県立案の計画があるとは言え、「具体的に何をどうしたらいいか」をなかなか明確にできず、ワーキング・グループのメンバーらは模索の連続であった。しかし、メンバーらは何度も入念な打合せを重ね、その中から開村式の内容や達者村らしい活動を生み出し、同年10月9日に『あおもり「達者村」開村式』を開催。プロジェクトを本格的にスタートさせることとなった。



達者村開村式



県の事業から自立して飛躍をめざす「達者村」プロジェクト

2006年1月には、旧名川町、旧南部町、旧福地村の3町村が合併したが、「達者村」プロジェクトは新・南部町に引き継がれ、活動エリアや活用できる交流資源が広範囲に広がった。合併に先立って、2005年11～12月には、「達者村づくり工房」が組織され、「達者村」プロジェクトの将来像や具体的な整備方針等を明確にし、地元住民・事業者と行政との連

携のもと長期的な達者村振興につなげることを目的にした「達者村振興計画」策定に向けて検討を行った。青森県の計画立案による『あおもり「達者村」開村モデル事業』は、2005年度でその事業を終えたが、南部町では将来にわたって「達者村」プロジェクトを続けていく方針を持って、2006年3月、町独自に「達者村振興計画」を策定した。

2006年6月には、それまでのワーキング・グループを発展させる形で、住民組織代表者や町役場の職員からなる「達者村づくり委員会」を設置し、現在まで活動を継続させている。

■「達者村振興計画」の概要（2006年3月策定）

◇達者村の将来像

「“友～ったり 遊～つくり 農～んびり” みんなが達者になれる村」

「達者村を訪れた方々に住民との交流を通して達者になっていただくとともに、南部町民みんなが来訪者との触れ合いにより達者になろう」という願いが込められている。（達者の循環）

◇実現するための4つの目標

1. 住民・団体を主体に行政と連携した推進体制づくり
2. 来訪者をもてなす交流環境づくり
3. 来訪者の長期滞在・定住受入を見据えた滞在システムづくり
4. 豊かな地域資源を活かした魅力づくり

様々な取組が展開される「達者村」プロジェクト

「達者村」プロジェクトでは、前述したように、これまで南部町で行われてきた「観光農園」、「産地直売所」、「ホームステイ」などグリーン・ツーリズムに関連する3つの主要事業をベースとしながら、それら事業の更なる発展と新たな関連事業の広がりによって、長期滞在二地域居住の実現をめざしている。「達者村」プロジェクトで始まった新たな関連事業で主なものは次のとおり。

①達者村特産品認証事業

町内の住民・事業者が製造する農産加工品、菓子、手工芸品などの特産品を「安全・安心か」、「達者（健康・長寿）に資するか」を重視した基準に基づいて、「達者村特産品認証委員会」が審査し、認められたものを「達者村特産品」として認証する「達者村特産品認証制度」を2004年度からスタートさせた。認証された達者村特産品には、“達者”に役立つ証として、「達者村認証産品」マークを表示できるようになる。「達者村認証産品」は、各地区の農産物直売所等で販売されている。認証マークが表示されていることで、販売促進・ブランド化とともに、「達者村」プロジェクトの町内外への浸透が図られている。

②達者村百景

達者村づくり委員会では、眺めることで心が癒され、“達者（健康）”になれるような町内の優れた景観ポイントを公募し、優れたものを100件選定のうえ、「達者村百景」として町内外に発信しながら、守り育てていく事業も行っている。

③達者村モニターツアー

達者村づくり委員会では、2004年10月の「達者村開村式」と2005年2月の2回、一泊二日の行程で住民との交流を楽しむ「達者村モニターツアー」を実施した。開村式でのツアーでは、ドライフラワーのしおり作り、りんごのジャム作り、満開に咲いた菊畑での菊の摘取、そば打ちの体験の他、「昔話語り聞かせの夜」で南部弁の味のある昔話を聞く会が持たれた。2005年のツアーでは、ハウス栽培のいちご狩りや米・梅・りんごの三種類の酢を使った長いもの漬物作りの体験、郷土芸能の「名川地方えんぶり」の鑑賞や達者えんぶり唄講座への参加などが行われた。宿泊先の農家では、せんべい汁や畑で採った野菜等を使った郷土料理が振舞われ、農家との語り合いが持たれた。

参加者からは、「農家の収入や後継者問題など普通のツアーでは知り得ない知識を得ることができた」といったような満足感あふれる感想が聞かれた。このツアーへの参加を縁に、2005年横浜市在住の一組の夫婦が長期モニターとして3か月間町内に滞在した。以降、各種のモニターツアーを展開している。

④農業インターンプロジェクト

農業に関心のある首都圏・関西圏の青年研修生が、町内の農家でインターンとして実地研修を行っている。大手人材派遣会社が2005年度から実施している農業分野での雇用創出などに向けた研修を、青森県と南部町が共同で受け入れている。観光農園の振興を図る「達者村農業観光振興会」や、農産物直売所を運営する「名川チェリーセンター101人会」など地元団体が、それに協力している。

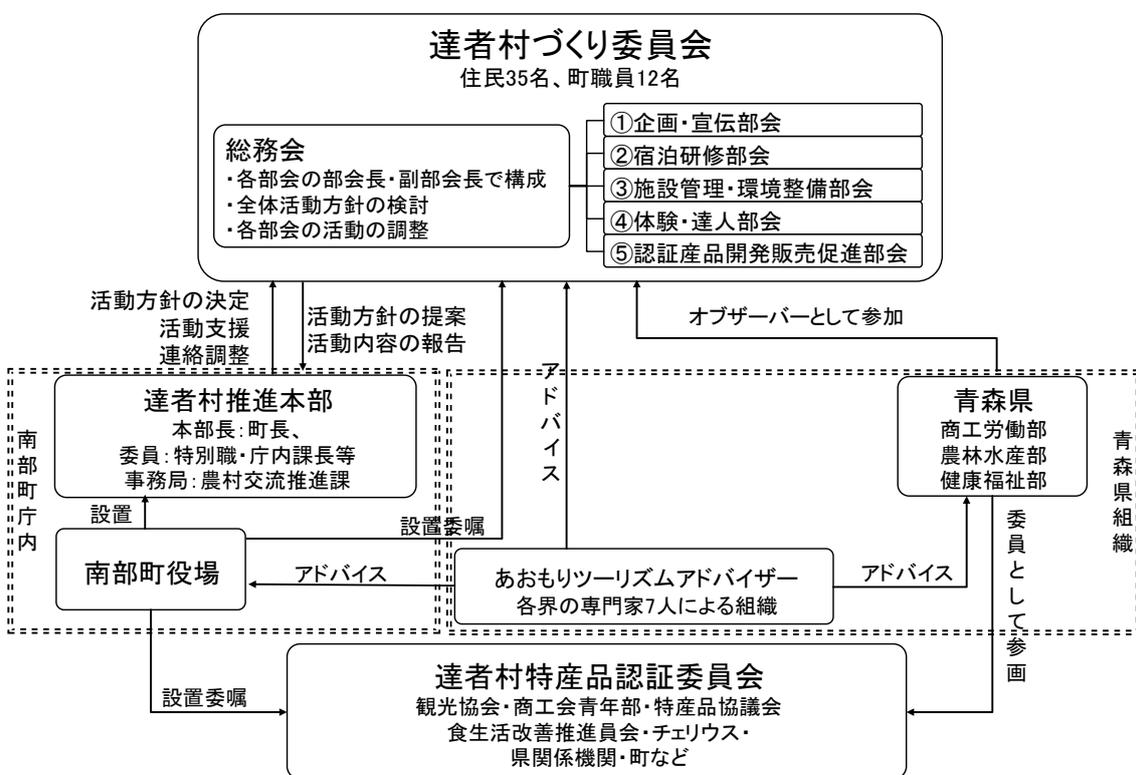
⑤花壇コンクール

2007年には、達者村開村3周年記念事業として、「達者村」プロジェクトの地元コミュニティへ更なる浸透を図り、全国から訪れる観光客等を花で彩られた達者村で迎えようと、地元住民・事業者を対象とした「達者村花壇コンクール」が南部町と達者村づくり委員会によって実施され、翌2008年度も引き続き行われている。

⑥その他、各種事業

「達者村」プロジェクトでは、こうした事業のほか、商工会によるグッズ（Tシャツ、携帯ストラップ等）の企画・製造・販売、フォーラムの開催、写真コンテスト事業、PR用のぼり制作など、様々な事業を展開してきている。2008年度には、交流活動を更に拡大するために、来訪者が農産物の植栽から収穫までを楽しむりレー農園「達者村ずっぱど農園」の運営や、町内の空き家の有効利用を通じて定住促進を図るための「空き家バンク制度」の創設などを行っている。

※「ずっぱど」とは、方言で、いっぱい、たくさん、という意味。



3. 今後の課題と展望

民間主導への転換で真の「達者村」をめざす“未完のチャレンジ”

南部町の「達者村」プロジェクトは、青森県からの呼びかけのもと、住民・事業者と町役場が連携して行ってきた「観光農園」、「産地直売所」、「ホームステイ」という3つの取組をつなぎ合わせる形で立ち上がり、様々な新規事業を展開してきている。だが、今後、「達者村」の理念の普及と具現化を一層進めて、“究極のグリーン・ツーリズム”を実現していくためには、乗り越えなければならない課題も多い。

町の担当職員は、次のように話す。「『達者村』プロジェクトは、『擬似農村（バーチャルビレッジ）』という表現で表されるように、はじめて見聞きする者にとっては一見分かりにくいこともあり、そのイメージや必要性、あるいは将来像を、より一層明確かつ具体的に示しつつ、地域住民・事業者等の積極的な参画がなければならない。特に、『達者村』プロジェクトが旧名川町で始まり、合併を経て他町村への広がりをも求めているため、町内全域への普及・浸透が課題と言える。また、現在は各種事業の中核を“達者な”中高齢者が担っているが、数十年単位で取り組んでいく事業の性質上、将来的には必ず世代交代しなければならない時が訪れる。そのことから、幅広い世代に取組の輪を広げ、“達者”のバトンが確実に受け継がれていく仕組みを作らなければならない。」

また、「達者村づくり委員会」の総務会会長（佐々木 進氏）は、今後への希望を求めて次のように話す。「これまで『達者村』を続けてこられたのは、行政の担当職員の情熱と粘り強さがあったからである。だが、将来、行政が止めたなら、事業はしぼむ。今やりたい事は、行政主導から民間主導に上手く切り替える事であり、それによって初めて『達者村』は“真に”成功したと言える。例えば、事務局の機能を行政がやっているが、今後は自分たち民間でやれる事は自分たちでやっていきたい。そのためにも、安定した収入源となる大きな柱を作る必要がある。」

町の担当職員は言う。「『地域づくりをお客様との交流につなげ、お客様との交流を更なる地域づくりにつなげる』、この終わることのない“未完のチャレンジ”に向けて、これからも地域住民・事業者とともに、じっくりと着実に挑戦し続けていきたい。」